



琉球大学学術リポジトリ

University of the Ryukyus Repository

Title	分球、株分け、取木法
Author(s)	友寄, 長重
Citation	琉大農家便り(87): 9-10
Issue Date	1963-02
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/20627
Rights	

でもパルプ原木としての質的条件を十分に備えていることが予想されている。現に本土の十條製紙が赤字を予想しての現存林の伐採利用をしながらも、造林による将来の利益を予想して、西表を主体に最近では沖縄本島の造林にも乗り出していることに注目したい。また最近、本土各パルプ会社では、遠くソロモン群島森林の伐採と輸入を執行せねばならない実情にあるが、さらに30年後には、木材総使用量は現在の1.5倍、パルプ原木使用量は現在の3倍の9,000万石を推定して多くの木材輸入を予想している。

以上のような条件にあるので、あらゆる空地に根気強く森林を育てて、完全な全琉緑化を速やかに完成して、美しく住みよい観光の島、自由貿易や天災におびえない農業、林業、水産業その他産業の確立された環境の島に

したい。

政府林務課では組織や予算や技術研究などの強化を図ることによって、緑化の主軸をなす山地造林については、1970年までの10カ年間に政府直営造林約8,200町、民間造林約24,500町が立案されているが、関係首脳者の理解と英断によって、国土緑化の前進のため、本計画が速やかに実現に移せる処置が採られることと、住民の協力によって、本計画以上の緑化の成績があげられることを望んでやまない。

1959～1962年度の間第1次緑化推進運動による植樹実績は約1,060万本となっており、去る11月以降の1963年度には約300万本の植樹が計画されており、住民各位の熱意によって計画以上の植樹が実施され、生育をとげていくことを望んでやまない。 (大山保表)

分球、株分け、取木法

種子を播いて繁殖する有性または実生繁殖法に対して植物体の一部を繁殖に用いることを無性または栄養繁殖と呼ばれる。無性繁殖法には分球、株分け、取木、挿木接木、芽接法がある。

1. 無性繁殖法が共通して重んぜられる主要な点

(1) 同一の形質の個体が簡単に繁殖できる。すなわち親木の一部を使用して生育せしめるゆえ、繁殖された植物体はすべて親木と同一遺伝的素質を持っている。種子によって繁殖する場合は個体間の遺伝的素質が著しく異なる場合が多く、また親木よりは一般に劣等な素質を持っているものである。それ故、無性繁殖法は果樹、花卉類の繁殖に広く行なわれている。

(2) 短期間に独立した苗が得られ、開花が早い。

(3) 一般に草丈(樹高)が低い。すなわちわい性で開花するので、果樹では収穫し易くなり、花卉では花壇、鉢植に適する。

2. 分球 株分け 取木法

1. 分球繁殖

分球繁殖は球根類の繁殖に行なわれる方法である。園

芸上、球根といっても植物学的には構造や組織が著しく異なったのが含まれている。塊茎(アネモネ、ランキユラスなど)は茎が団子のような塊になってできている。球茎はグラジオラスやフリージアのように茎が養分を蓄えて多肉になり、外観は茎が圧縮されたように短い節が見える。鱗茎には二種類あり、スイセンやアマリリスのように外側が皮につつまれ玉葱の形をしているものと、ユリのように鱗片がばらばらについているものがある。カンナやジンジャは地下茎が太ったものだが、園芸上球根として取扱われている。地下茎は一節ごとに芽も根も出るので、繁殖は容易なものである。塊根はダリアのように根が太って球根になったもので肥大根の上部クラウンと呼ばれる部分についている芽もつけて分割しないと芽は出ない。

分球繁殖は栽培中自然に生ずる子球あるいは分球を分離する方法と人工的に種々の操作を行って子球の着生を旺盛ならしめる方法がある。すなわち、ユリの場合には、植付けられた球根がある期間たつと自然に分球し、容易に分離繁殖ができる外、母球の上部から地際にある茎の葉腋に数個の小形の球根ができるから、これを繁殖に用いる。このものは木子とよばれ最も広く繁殖に用いられている。また一枚一枚の鱗片を挿木するとその上に子球が発生するので、一時に多数増殖することができる。

鱗片は母球の一番外側の一列は病害を被っている恐れがあり、貯蔵養分も少ないので取り除き、その次の層から用いる。また繁殖を目的として栽培する場合には、木子や母球の充実を図るため、蕾はなるべく早くつみとることが必要である。

スイセンなどはある年代栽培された時容易に分離繁殖することができる。グラジオラスは品種によって新球根の下面に多数の豆粒状の小球ができ、一方母球から生ずる芽の発生の旺盛なものは分球が多く、この両方で繁殖される。小球は木子と呼ばれ、種類と栽培法によって著しく異なり、少ないもので3~4球、多いもので300~400球も着くものである。これを上手に播けば急速に増殖することができる。その上、この木子の中には春播いて夏から秋に開花するものが相当多く、これらは切花として高価に販売できることもある。また球茎は発根部分と発芽すべき芽の部分をつけて鋭利な小刀で分離するとき、完全な分球繁殖ができる。

2. 分株繁殖

普通、株分け、芽分け、根分けと呼ばれ、灌木類や宿根草の繁殖に用いられ最も簡単な方法である。

ガーベラは肥沃な土壌では1年に10数芽発生し、よく開花する。3年目になると株が大きくなりすぎ、花芽の着生が不良となるゆえ、一株3~5芽とし秋から春にかけて株分けする。株分けには鋭利な鎌や長い庖丁などで芽を傷つけないよう短縮茎を切る。新たに植付ける場合には根と葉を半分位に切って深植えしないようにする。切花を主とする営利栽培では、鋏で一芽一株に分けたものを株間30cm、条間30~60cmに植える。

キクの株分けは栽培の目的、種類などによって異なるが、圃場において大量生産の切花栽培、懸崖菊の栽培、確実に繁殖しようとする場合に行なわれる。相当大株を養成するためには秋しよ花後、その根本から幾分遠ざかった部分に発生した短大の充実した根茎を用いる。普通栽培では3、4月が適しているが、キクには秋菊、寒菊、夏菊など各種品種、系統が多く、また日長処理（電燈と暗幕を用いる）により周年切花として出荷されるので、株分けの時期もそれにより考慮されなければならぬ。

その他、アンソリウム、アスパラガス、ラン類、パンダナス、クンシラン、カラジウム、カンナ、イチハツ、ジンジャ、カラー、スイレン、オモト、シユロチク、カンノンチクなども株分繁殖が行なわれる。これら宿根草の株分けの時期は一般に地上部が枯れるか生育が殆ど止って後から早春の発芽期直前までの間に行なわれるが、

初冬に株分けを行うと翌年の開花、生育には良い結果をもたらす場合が多い。（つづく）（友寄長重）

訂正

1963年1月号(No.86)3ページ第1表 1.3.407.59→340.795
3ページ左下12行34.00→340.00 4ページ右下1行国産→
外国産 以上おわびして訂正します。